

唯識三轉法輪説が想定した初時_{有教}の意義

——『解深密經』・円測『解深密經疏』を手がかりとして——

橘 川 智 昭

一

唯識宗の三轉法輪説は、周知のごとく、初時_{有教}（阿含）、第二時_{空教}（諸部般若）、第三時_{非空非有中道教}（深密・法華・涅槃等）であるが、いま一度整理すれば、初時は、声聞乘に発趣する者のために、外道の執じた実我を破して、生空（我空）法有を明かした教えであり、第二時は、大乘に発趣する者のために、諸法皆空を示した教えである。初時の有教は、仏が依他起性に立って説いたものであるのに、声聞衆はそれを誤解して法を実有となし、そこから初時は、主として説一切有部の立場といわれる。第二時の空教は、遍計所執性に約して説かれたが、依他起性と円成実性の存在を隠して説かれた教えとされる。初時_{有教}が偏った有を説き、第二時_{空教}が偏った空を説いたために諍論安足の処所となり、それらを是正して三性三無性義を明らかにする第三時_{中道教}の意義が認められていく。以上の説明は、文献により多少の相違はあるものの概

ね一般的であろう。

初時・第二時において、教えの真意とその教説の不完全性に起因する対告衆側の誤解とがあり、質的に対告衆の誤解に比重が置かれ、唯識宗と他宗との構図として三轉法輪説は理解される。『解深密經』の所説である三轉法輪説は、中国以降の教判とは異なるものであるが、天台・華嚴等の教判議論で取沙汰され、唯識宗の教判としてうけとめられてきた。

想起される点を二、三あげるならば、例えば法蔵『探玄記』にかの戒賢と智光の三時説がみえるが、その戒賢の三時では、初時_{有教}「雖説生空然、猶未説法空真理」、第二時_{空教}「雖依遍計所執自性説諸法空、然猶未説依他円成唯識道理」、第三時_{中道教}「具説三性三無性等唯識二諦」とあり、一方智光では、初時_{有教}「心境俱有」、第二時_{空教}「境空心有」、第三時_{中道教}「心境俱空」と示される（大正三五、一一下―一二上）。第二時と第三時が逆である点はいまは措き、少なくとも両者共通であるはずの初時_{有教}への評価態度にしても、それぞれの問題意

識や主張文脈によつて焦点のあてどころが異なつてくることは本来留意されるべきであろう。⁽¹⁾

それから三転法輪説の典拠である『解深密経』の無自性相品には、第二時と第三時は共通に「一切法皆無自性、無生無滅、本来寂靜、自性涅槃に依る」のであつて、第三時教の意義は、第二時には隱密の相があり、それを顯了相（三性三無性）ならしめる点にあるとされる。これまでも指摘されているように、『解深密経』では第二時の思想が第三時の立場と対立するものとは考えられていない。⁽²⁾ ただ最勝子の『瑜伽論釈』冒頭部分、『瑜伽論』の造論意趣の箇所、竜樹・提婆を根拠に空見に著した衆生がいたために、無著が法光定を証して大神通を得て『瑜伽論』を造つた云々とあり（大正三〇、八八三下）、あるいは調伏天の『三十頌釈疏』に、瑜伽行派の或る者が中觀派に対して一切種に無であると主張して遍計所執の体としてのみ無であるとは許していない者とみなしていたという一節がみえるようであり、⁽³⁾ そのような記事に鑑みると、第二時が直ちに悪取空的に扱われるにせよ、ある条件下での問題視が般若・中觀全般に押し広げられたもの⁽⁴⁾ とするのが妥当とも思われる。

こうした諸点から本稿では、三転法輪説において、特に初時教というものを唯識宗ではどのように想定して意義づけたのか改めて検討する。初時において人々は生空を証したが

法有に執じ、その法執を破するため第二時で空教が説かれたという。そこを捉えれば、初時は生空法有を証果とするこゝとができる。ところが三転法輪説の典拠の『解深密経』と、その代表的註疏である円測（六一三―六九六）の『解深密経疏』（以下、測疏と略す）とを検討すると、初時教は、第二時空教との相反とか、声聞という劣種性の立場などと片づけられる以前に、まずは一貫した大乘の菩薩道として評価し直される意義を見出すことができる。

二

『解深密経』無自性相品第五は、初時教・第二时空教の説示内容を次のように示す。

爾時勝義生菩薩摩訶薩白仏言、「世尊、我曾独在靜處、心生如是尋思。《A有教》世尊、以無量門、曾說諸蘊所有自相・生相・滅相・永斷・遍知。如說諸蘊、諸處・緣起・諸食亦爾。以無量門、曾說諸諦所有自相・遍知・永斷・作証・修習。以無量門、曾說諸界所有自相・種種界性・非一界性・永斷・遍知。以無量門、曾說念住所有自相・能治所治・及以修習未生令生・生已堅住不忘倍修增長廣大。如說念住、正斷・神足・根・力・覺支亦復如是。以無量門、曾說八支聖道所有自相・能治所治・及以修習未生令生・生已堅住不忘倍修增長廣大。《B空教》世尊、復說『一切諸法皆無自性、無生無滅、本来寂靜、自性涅槃』。未審。世尊。依何密意作如是說『一切諸法皆無自性、無生無滅、本来寂靜、自性涅槃』。我今

請問如来斯義。惟願如来、哀愍解釈。說「一切法皆無自性、無生無滅、本來寂靜、自性涅槃」所有密意」。(大正一六、六九三下—六九四上)

無自性相品冒頭で、その対告衆である勝義生菩薩は、曾て仏によって、諸蘊・諸処・縁起・諸食・諸諦・諸界(六門境界)の自相等の諸相、そして、念住・正断・神足・根・力・覺支・八支聖道(七科道品)の諸相について説かれたことがあり、その後、「一切諸法皆無自性、無生無滅、本來寂靜、自性涅槃」と説かれるに至ったことをあげて、それら教説間の矛盾に疑念を懐く。ここから「一切諸法皆無自性、……」にいはかなる密意があるのかと勝義生が請問して、三無自性性の議論が展開されていく。

三

有教と空教とがこうした説示内容とするならば、実はそれに先立つ、同經の勝義諦相品第二、第四段遍一切一味相の所に注意される。ここでは勝義諦の遍一切一味相について長老善現(須菩提)が対告衆となつて明かされるが、冒頭、如来の告問に対する善現の奉答において、有情界の中、少分の有情は増上慢を離れて所解を記別し、無量無数不可説の有情は増上慢を懷いて所解を記別する、とあり、さらに、善現が阿練若大樹林に住していた時、依近してきた衆多の苾芻がお

唯識三転法輪説が想定した初時教の意義(橋川)

り、彼らは有所得の現觀によつて各種種相の法を説いて所解を記別していたとして、その様子について次のように述べられる。

於中一類、由得蘊故、得蘊相故、得蘊起故、得蘊尽故、得蘊滅故、得蘊滅作証故、記別所解。如此一類由得蘊故、復有一類、由得処故、復有一類、得縁起故、当知亦爾。復有一類、由得食故、得食相故、得食起故、得食尽故、得食滅故、得食滅作証故、記別所解。(中略)復有一類、由得念住故、得念住相故、得念住能治所治故、得念住修故、得念住未生令生故、得念住生已堅住不忘倍修増広故、記別所解。(以下、省略)(大正一六、六九一中—下)

ここでは蘊・処・縁起・食・諦・界の六門境界、および念住・正断・神足・諸根・諸力・覺支・八支聖道の七科道品によつて所解の記別が示されるが、実は先の無自性相品^①有教の文とパラレルであり、一經を通じて対応關係が意図されていることは疑いない。増上慢の苾芻とは、既に有教に浴していることが前提としてあり、そこに法執を懷いて所解の境地を記別する声聞達であると類推することが可能である。

ところで測疏においては、

謂唯初地已上菩薩。如實了知遍一味相法空勝義。由此不起法増上慢。非諸二乘及異生等。故言少分有情離増上慢記別所解。(統藏一—三四—四、三四九左下)
今依大乘大同二宗(薩婆多宗・經部宗)。慢通異生有學聖者。(同、三五〇右上)

問、七地已來諸菩薩等於増上慢亦得起不。答、有三釈。一云、初地已上不起上慢。已得勝義一味相故。一云、七地已還起亦無失。如經所説故意起故。一云、前七地中不唯得起煩惱障慢、所知障慢亦得現行。地地相望有勝劣故。（同、三五〇左下）

などの釈文がみえる。円測は増上慢者の規定を種々の観点から詳述しており（同、三四九左下—三五一右下）、修行階位の中で必ずしも一律に線引きできるものではないようであるが、ともかく増上慢の概念について、二乗の法執という範囲にとどまらず、大乘の菩薩についても広く解釈の行われていることがみてとれる。

この勝義諦説において、円測は、増上慢を離れて所解を記別する者とは、遍一味相なる法空勝義を如実に了知する者であり、それを初地已上の菩薩であると考へ、二乗と異生とではないと述べる。この異生とは、初地已上の菩薩との対置としてみれば、初地已上「聖道」に未だ入らない段階、すなわち資糧位・加行位という菩薩の異生位とすることができると考へられる。

筆者は別稿で、測疏は後得智とか依他起相という考へ方を生かして『解深密經』の空・勝義諦説を捉える特徴があることを論じたことがあり、法空の了知についてはその問題までふみこんでおかなければならないが、いずれにせよ、初時教との連絡を予想しうるような諸法分別の問題にあたり、法空を了知しえない二乗および法空を了知しうる菩薩という視

点のみではなく、表立ってみえにくい但未だ法空を了知しえない低位の菩薩という觀念も用意されていることが看取されうるのである。

四

他の箇所によってさらに進めてみたい。『解深密經』の無自性相品では、そこで明かされた三無性義により、さらに有情界における流轉門と還滅門との各々に約して順を追って詳しく説かれていくが、以下はその還滅門の一節である。紙幅の都合上、測疏の釈から注目される部分のみを抽出し、經文の該當箇所を山括弧にして配する。

〔疏〕約位弁三無性意。於中有二。①〔疏〕約五位弁生無自性性。即當唯識初資糧位及十信前種解脫分善根位也。復次勝義生、若諸有情、從本已來未種善根、未清淨障、未成熟相統、未多修勝解、未能積集福德智慧二種資糧、我為彼故依生無自性性宣說諸法。彼聞是已、能於一切緣生行中、隨分解了無常、無恒、是不安隱變壞法已、於一切行心生怖畏、深起厭患。心生怖畏、深厭患已、遮止諸惡、於諸惡法能不造作、於諸善法能勤修習。習善因故、未種善根能種善根〔疏〕一種善根位、謂十信前種解脫分善根位。種解脫分善根之法、未清淨障能令清淨〔疏〕二清淨位、謂即十信。謂能隨分淨罪業故、未熟相統能令成熟〔疏〕三成熟相統位、謂即十解。能令信等相統成就故。由此因緣、多修勝解〔疏〕四多修勝解位、謂即十行。決定勝解多現前故、亦多積集福德・智慧二種資糧〔疏〕五積集福智資糧位、即十迴向。具足福・智二資

糧故)。⑥〔疏〕約加行等位説後二種無自性性。彼雖如是種諸善根、乃至積集福德智慧二種資糧、然於生無自性性中、未能如實了知相無自性性及二種勝義無自性性。於一切行未能正厭、未正離欲、未正解脫、未遍解脫煩惱雜染、未遍解脫諸業雜染、未遍解脫諸生雜染。如來為彼更説法要、謂相無自性性及勝義無自性性。為欲令其於一切行能正厭故、正離欲故、正解脫故、超過一切煩惱雜染故、超過一切業雜染故、超過一切生雜染故。〔疏〕明加行位中所得勝利。彼聞如是所説法已、於生無自性性中、能正信解相無自性性及勝義無自性性、簡択思惟〔疏〕即四尋思、如實通達〔疏〕即四如實智也。又解、簡択思惟者四尋思位、如實通達者初地已上通達位也。〔疏〕弁地上二位所得勝利。於依他起自性中、能不執著遍計所執自性相。由言説不熏習智故、由言説不隨覺智故、由言説離隨眠智故、能滅依他起相、於現法中智力所持、能永斷滅當來世因。由此因縁、於一切行能正厭患、能正離欲、能正解脫、能遍解脫煩惱・業・生三種雜染。(大正一六・六九四下―六九五上。続蔵一―三四―四、三八六左上―三八八右下)

右の⑥において、生無自性性に依つて諸法の宣説があるとされ、それにより未だ善根を植えざるを能く善根を植え、未だ障を清浄にせざるを清浄ならしめ、未だ相続を成熟せざるを成熟せしめ、多く勝解を修し、福德と智慧との二種の資糧を積集していくという。円測は、十信前・十信・十解・十行・十廻向の資糧位としてこれを位置づける(この十信と十住とを別立する円測説は、十信を十住の初住に摂して解した正系唯識からの所破となつたといわれる。『義灯』巻七本、会本四、三七―三七二、他)。次に⑦では、相無自性性・勝義無自性性を信解

唯識三転法輪説が想定した初時教の意義(橘川)

して、簡択思惟し、如実に通達し、依他起性において遍計所執性の執著を離れると説かれ、これを円測は、加行位・地上二位(通達位・修習位)と位置づける。

必ずしも測疏によらずとも、生無自性性による諸法の宣説(⑥)が初時の有教に相当し、相無自性性と勝義無自性性にもとづく説示(⑦)が空教に相当すること、また修習論としてみると、前者による修習が低位に属し、後者による修習が高位に属することは、経からみてとれる。円測自身の三時観は、測疏の玄談に「而言三時所説教者、約義淺深廣略義説、非約年歳日月前後説三時也」(続蔵一―三四―四、二九八左上)とあり、義類の淺深に立っていることは知られるのである⁽⁶⁾が、ただその低位と高位ということについて、三乗種性差別のような有情の多様性をもってわりあてるのではなく、特定の菩薩における、低い階梯から高い階梯へのひとすじの修習次第とみる捉え方であり、三無性義が明かされた上で、そこからふりかえつて曾聞の有教と空教とを会通的に評価するものといふことができる。第三時教の意義役割は、むしろそのようなものではなかつたかと思われる。

完成された通説からすれば、ここは『解深密經』における意の通じにくい部分であつた。ちなみに香樹院徳竜(一七七二―一八五八)の『解深密經講讚』は、特に⑥の部分で、初時教ならばなぜ福德と智慧との二種の資糧とあるのか云々と

問いを起し、「進退所難誠為難通。今竊按之」ともらし、別して三乘所被の相を説くものではないが、二乗の境行は必ず菩薩の境行であり、二乗の修相は菩薩の行位に在り、と考えるなどし(日藏八、一四七上)、有教「二乗」という觀念から疑義を呈しているようにみえる。『解深密経』は三転法輪説の典拠ではあるが、その内容は後世定着する教理からすると整合のとおりづらいものであったと考えられる。しかし遁倫『瑜伽論記』にみえる神泰・文備などの引文も円測と大差なく(大正四二、七七五中)、円測の釈は特に経の趣旨をはずれているとされるものではなかったと思われる。

五

初時有教の所被機に菩薩をあてることがは通念上なじまないが、無自性相品では、その対告衆である勝義生菩薩が、曾聞の有教と空教との間に疑念を懐き、三無自性性の密意義を聴き、菩薩としての自己の領解において完結するのであり、まづ有教は他者問題ではない。しかしまた、この三無性義にもとづく有教(低)↓空教(高)の一貫性というところから、密意一乘(三乘真實)と廻向菩提声聞(測疏では「不定種性廻向声聞必当成仏」「実説一乘」)の説が経において展開されるに至る(大正一六、六九五上―中)。その密意一乗にしても、少なくとも文脈的辻褄を求める限り、異宗として見立てた、第二

時「一乗」への批判的会通とは考えにくいのである。この文脈展開の問題については、改めて論じたい。

- 1 長尾雅人「教判の精神」(『密教文化』五・六、一九四九年)、二六―二七頁。
- 2 本稿で扱う円測に関していえば、第二時と第三時を融和させたところに円測の独自性があるなどと論じられる場合がある。空・中観など他宗との調和をはかり唯識宗のみに固執しない態度であったという論調におけるものであるが、しかし、従来指摘されたような『般若経』系の影響が強いという『解深密経』自体の思想的特質の問題とともに、円測の『解深密経』の捉え方、およびそれにより経から自ずと導かれると自覚されている解釈の部分、あるいは経の枠を超えて思想を披露している部分などのみきわめに注意が払われないまま急がれた整理づけになっていると思われる。円測における第二時教観については、徳竜の『解深密経講讀』との対比という方法により、十全とはいえないが検討を試みた(拙稿「三性説と空教―『解深密経』註疏の理解から―」『言語・文化・社会』五、二〇〇七年)。
- 3 山口益・野澤静證『世親唯識の原典解明』(法蔵館、一九五三年)、一四九―一五〇頁。
- 4 山口益「印度大乘教学史に於ける教相判釈の展開」(『大谷学報』二五―一・二、一九四四年)、二四―二六頁。
- 5 拙稿「円測の無自性観」(『印仏研究』五五―二、二〇〇七年)、四八―四九頁。前掲拙稿、一二九―一三三頁。
- 6 吉村誠「唯識学派の三転法輪説について」(『駒澤大学仏教学部論集』三六、二〇〇五年)、一七二―一七六頁。

〈キーワード〉『解深密経』、『解深密経疏』、円測、三転法輪説、

初時、有教

(東洋大学・東海大学非常勤講師・博士(文学))